



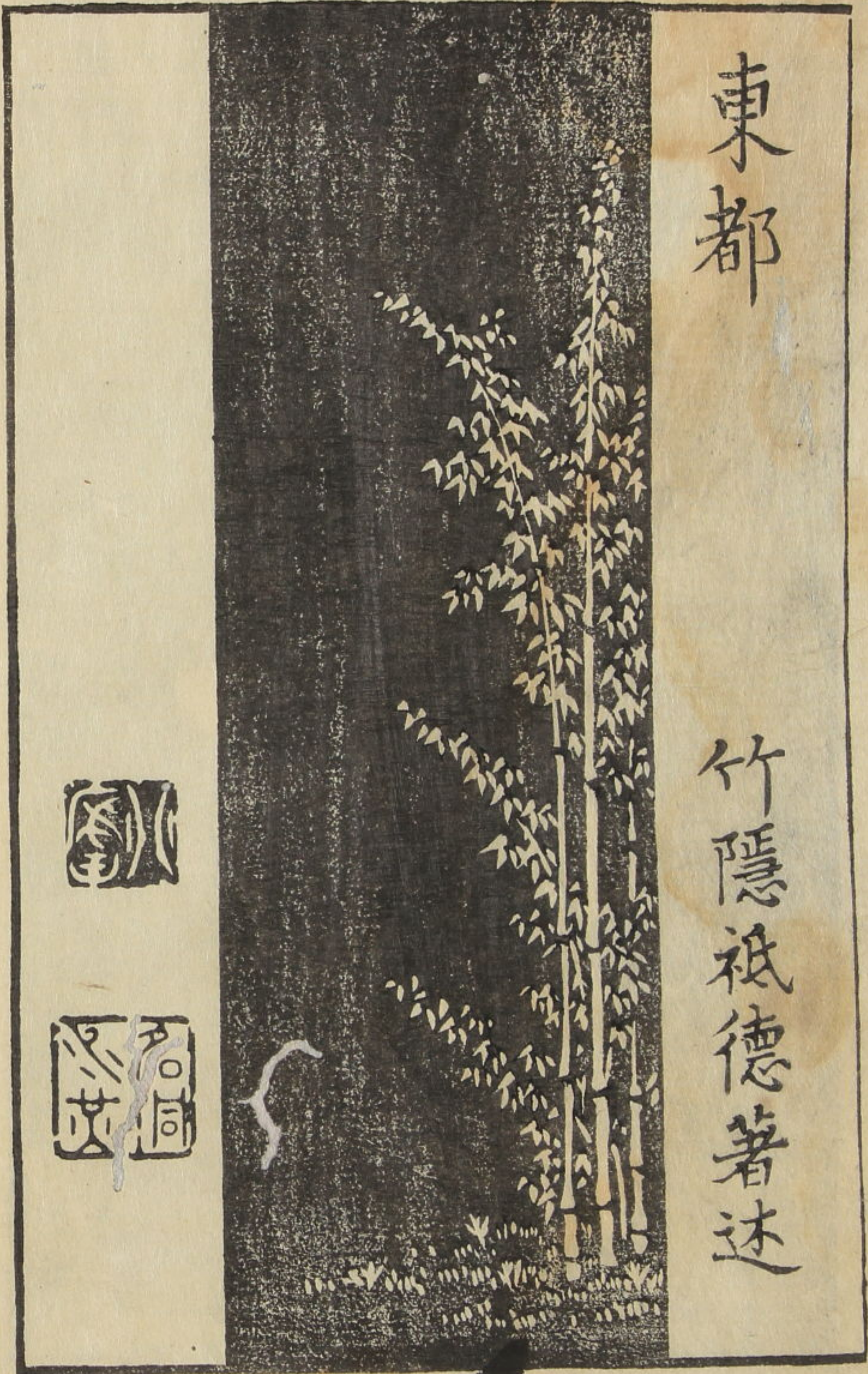






東都

竹隱祇德著述



乙言庭訓

古學問より書三經ありて其書終より  
 攢擷して嚮より其條目然して其今  
 亦むと云ふ所の庭の訓は猶率して  
 一語と耶一文中は擷を輕く傳ふより  
 其るるもあり儒家より一言以蔽之  
 佛家よりは雖誦千言我心不滅不如  
 一与と云ふ所の書は全く其方譯より



いづれ一言能社中人に饒益を与ふる也  
一古學門ハ仁齋徂来兩派の名目よりなり  
つふふもふもあらずとて爲にしりて其  
を驅り行ふ詭辯をんたのむつあらず也  
孔子古之學者爲己の事なり  
本つ

一爲己の事而後人及む人におきて  
而後世にむらふは是等の人をいふ

師範乃器とつれ也

一抄詠詠詠ハ今日あり

一巻を小世界なり

一くわいかりは名目にして實ハ世界なり  
一く歌ハ一乃如平日古今集あり  
く言篇を用ふも  
言篇人篇は論なり  
乃爭論淺く



一 卷中皆世間れ盛衰有為轉變の理を  
觀——仁義五常のあり方をも佛神の  
冥冥の作られたるのつゝ 勸善懲惡の  
一卷を以て夫若貴賤の今日をうけつゝ吾等を  
かつとみるよは詠詠のあり方をもいふ  
一 世間の大いなる士農工商の今日ある  
かゝるものあり

一 風雅の録をくくくいふと五七五と云く

さる人もその人の生年皆今且詠詠や  
一 口より金言妙句ありとて今且詠詠あり  
人ともその事也

一 父母を孝とてはく——族をむつとて家  
族を愛とてはく——皆今且詠詠也  
一 朋友と交わりしは附合を求むとて  
まゝ附合の能くも亦越のありき人  
あり可考



一人の親おとすの誠ありてあつたまへん  
道の淺きよあつても白く都調ひの  
子しるしめいひのまへにあやまらば  
は道に罪人や或は淫室に何そいひ  
博奕や交りて媒と心得て争く禁め  
あつたまへん人のよかりあつたまへん  
時め名利に趨き我慢愈熾り道  
を去るも愈遠しるの心くつたの

とららり屈執して自讃毀他一果ハ  
職を多かり業を多かりて家を多かり  
あつたまへん習教はあつたまへん  
は愁を懐くといふも毎時あつたまへん  
ちのころ自在菴の祖宗とあつたまへん日と  
社中面會誹謗りあつたまへん初老乃  
年を待ててあつたまへん愚者の管見  
もあつたまへん



風月より家業の産一筆乃事

誹學校の弊に題一わのこ入く  
教戒の句や

一 詠諧の詩を父一和交を母と連交  
を見よと云

一 詩の胤を和奇に孕く詠諧の出生を  
連歌より詠くハヤと云くハ夢の女を  
用ひくからくハ音を不用仍く詩を

父と云くハあハハハ吾乃ハ夢ハ音  
ハ交くハ和漢合ハ道ハハ詩を父  
宗ハ母

一 古今集ハ詠諧歌より吾乃の名ハ出生  
をハ母ハ和交を母と極也

一 式法先キハお生とハハ連歌を見ん  
ハハハの連歌ハ今ハ詠諧ハハハ  
ハハ五書を見んハハハ







方とて無<sup>い</sup>りし<sup>る</sup>無<sup>い</sup>りし<sup>る</sup>無<sup>い</sup>りし<sup>る</sup>無<sup>い</sup>りし<sup>る</sup>  
もらま<sup>り</sup>もらま<sup>り</sup>もらま<sup>り</sup>もらま<sup>り</sup>四教を憎<sup>む</sup>を<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>  
信心急<sup>ぎ</sup>なり<sup>し</sup>なり<sup>し</sup>なり<sup>し</sup>なり<sup>し</sup>本旨と<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>  
一吾家より五等之大綱と<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>時々刻々  
得<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>事あり

- 一 和合は謝諍あり
- 二 安民のく<sup>い</sup>い<sup>り</sup>あり
- 三 言行の純結あり

四

知足の純結あり

五

多識のく<sup>い</sup>い<sup>り</sup>あり

一 和合より君臣和合は實にお對  
し<sup>る</sup>は道は要務也師弟社友  
乃中むつ<sup>ま</sup>し<sup>る</sup>互に補助を<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>  
此を行<sup>ふ</sup>時<sup>に</sup>諫言を<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>是に  
ふ<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>時<sup>に</sup>異見を<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>並諫  
あり<sup>し</sup>人より諷諫は<sup>ら</sup>ん<sup>く</sup>諷諫也



きやう今より今より並し諫をなすべし  
連衆の中より時座學子の本  
とや

一 羣而不黨とて和を以て衆を處  
しあり一 衆もよも衆あり禮あり  
は乱るゝのや卷み礼讓の教  
あり常より禮讓をわらぬ  
今日れ和合一卷れ和合を志す

例の世卷一一致しとて日く白々乃  
和合ありとて

一 軸の方筆一挺の墨は折やはしく  
筆を十本のつゝ墨を十挺の  
折やは折やは一團の徳ありとて  
考と六となは不和ありも和合の  
諺諺を知らさかりとて  
一 安民とて今より治世安民とて











からり

一 此の如くは句盛なりといふも  
句衰事ありは句算もくや時  
はは道遠おとせも控りて  
思ふ人も句教すれども  
こころの時に詠を廢せり  
思ふもやちりて終り  
やむは人あり

一 書曰く時必らば句志あり  
考ゆらるるは又たも如き  
知正を忘るる

一 多識といふは多識草木禽獸  
名もや四季の數品年中行事  
諸國の名産萬邦の名跡古人の  
官名士農工商の業俗諺平話  
りいらいらるる皆一巻の多識なり



一 儒佛道神之書歌書軍書抄  
みらの記技藝之書の所抄も亦  
雅書まゝく一帙とすれどもおのま  
性もらう記を物よみからか  
るも誦誦乃多識なり

一 古學門より九ヶ之附方といふハ  
句作之四道 添順離逆  
趣向之五道 人時天心處

四道ハ連歌の古法也ハ五道ハ不傳  
新製也

一 句の調をあらと古學門のからむ也  
一 又侘といふ積りつふ事あり  
一 かつこの名目と身をなまらふ事  
吾門乃道術也  
一 百葉之吟ハ一巻乃興  
是又吾門の新製なり句ヲ連者



を附する為や名月ハ七楽之詩ヲ  
本にあり

一 丑刻歌仙。寸香。三言。句合。

句評。判席。百會

右之名月門人おまよりいへ修り  
乃仕方あり

一 吾家より小座鋪別戸を建てる  
其人結乃詠詠あり

一 吾家の國字詩ハ他門よりふらふの  
詩や志あり去の世に座のらん

一 点取を嫌ふ事無基名魚的哉  
六の巻を師教するやふ如し

一 点の道の階持より一壺一興乃  
ものなりと初字おまみけみよハ  
やろしとれと心上りよむ詠詠  
とハ雲沈のよむあり吾家の詠



職心は方々事や

一 詭詐は享祿天文之以一途權輿  
一 一くく今世舉くく且夕乃遊  
興もなれ

一 道は貞徳あり句は色蕉あり  
一 謀り古人がーやいふ

一 秀く逸必此虚毎自然の妙あり  
いふおれもの也是吉字門の決定

外ありそれを嘆嗟雨を降嗟のふ  
造物天に不慮く我作く懸ー

一 詭詐乃修行ハ後世者り何あり  
一 父母とも妻子とも棄く世乃桎梏  
を離れく出家遁世あるハ今日  
詭詐乃本をりあらん

一 初は善業をり法もめく解分よを  
よーみ中以業中り隠を試



後年ハ凡雅乃古隱と云る是也  
 修行乃初中後と云ふ其の次第ナリ  
 拙者ハ在在年以テ樹下石上の  
 志ありしも何は乃好癖あり  
 一 此世ハ愚を勤し事平素乃心  
 多クあり  
 一 近くと遠くと求むべからん  
 一 阿ふ心と道ハ四十ナリ起るべし  
 一 阿ふ心と道ハ四十ナリ起るべし

微軀敢て一言語んや言はるる  
 元文五襪晚冬念五後園乃  
 所短と云ふ別廬ある水光洞  
 耳木あり竹隱者祇徳法あり



右定本 門人  
 奚疑齋祇長 寫  
 東天坊獨林



右一言庭訓者竹隱先生之所著也  
門人傳錄之本條不一騰寫轉訛  
學士憾焉恐其遺疑誤於遠境  
今茲正月速乞定本壽壽諸文梓  
以貽同好

元文六年辛酉孟春  
雲中子水室  
夏初齋冬扇

五書

古學談 古學辨 古學論

古學解 古學式

三經

國字經 漢字經 靈經

二典

天長記 地久抄



水岩洞のわらわら大百歩場  
ありと興行ありとひそ乃  
中乃一二を採く此集り  
附録さるる道場は教経  
茲亦くくくくくく乃  
くくくくくくくく  
自在庵  
執事

百歩之吟

橋北連

紫丹胡蝶

紫丹必心の故蝶のみあり  
掉

祇長

白牡丹

草之名は白牡丹

題初雪

初雪也世より初人あり



石上落葉

教必世乃花と申すも石の上

水室

雪中鉢扣

瓢箪に雪をいれ鉢に

湖上鳥

涼 湖上鳥乃澄ぬる

冬扇

名月迷子

名月迷子 子守の親の言

名所郭公

雲山を眺むるは

祇貫

坂下砦

坂下砦 小坂をぬ

夕暮れ柳

戸に牧待合を

祇南

松原草狩

松原草狩 夕日影



市中可哉

万葉也隨風かきけ袖乃掌

祇負

題鶴頭

鶴所也浮世を似たり花は

雨日琵琶

琵琶也音也かき雨は啼地

竹亭

曙帰一

一合帰れやもと山かしら

寐覚郭云

あ乃夢ち寐く夢の時の

獨林

晴天時雨

浩穽を日や松風のふきか

月夜煤拂

煤掃ぬるはよまほ月れい

橋南連



日中れかんはる

啼や火いさくもあき昼らんはる

素隠

夜行疑霰

降やみくもあらし星月お

夕お記の貝むら

沈みくもにやらゆほ志英貝

祇實

閨前穂屋

穂屋あきふから秋の息がら

少年行

樽記の屋はほり花の山

祇天

國兩埋火

埋火の親事ある新御

昨日木枯

木枯らぬる新御大社

祇幽

釜中鶏

煤よりあ釜中鶏の焼る



水上蝶

花をらて教や小蝶は多し如く

紫雨

庭上初雪

初雪や中つ流しに如く

河色千鳥

初雪は千貫く流しに如く

沖光

古寺紅葉

入相れ花や如く如く寺とみら

間日蝶

蝶は六乃千走つて如く

梢雨

鬼さくら

羽人乃心花つて如く

駒江連

海上藻

花は六乃千帆如く如く

流光



奇葬述懷

朝負れ春秋久しう田んぼ

社頭三月

鯉才年明しん新也三月月 祇来

岩間常

常は深きやまに上り岩れ

古城若竹

藪垣と城の竹のたけ 林泉

旅泊乃み

るやみくまに旅泊の

遠連

大内名目

二本松

名月やうりりもあまに云れ上 祇蕉

鈴鹿山霞

霧好の青も鈴鹿山霞



聞夜雪僅

櫻川

雪之必月九晦乃肯也

風德

園中雪

雪之必音紙振水之於梅柳

百步吟終

跋六章

古學詞宗

雪之心得也

梅乃

祇明

關口乃確房可入

飯可費

由之源也水車

かひり

雪



獨寐如夢此心乃蚊至始知 空翠

白秋也  
等不及也

可  
我  
也

惣門人三百有余輩

彫工芥澤 彦七

江名木橋二所目  
書林 倉屋喜兵衛



